

【音楽科】教科提案

「比べる」ことでせまる音楽の魅力 ～思いや意図をもって表現できる子どもに～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

音楽科ではこれまで4か年にわたって「比べる」をキーワードに、小グループにおける「協同的な学び」の実践・実証を重ねてきた。質の高い「ジャンプある学び」成立の要件として、目標設定をはじめ教材選択や課題設定の良否が挙げられた。また、繰り返される旋律やさまざまな反復のかたちなど、音楽的な要素や音楽の仕組みに注目することで子どもの学びの質が高まっていくことも確かめられた。

本年度は学校提案「学びをデザインする子どもたち」を受けて、音楽科では「比べる」をキーワードに、生涯にわたる音楽的な「自己教育力」の育成につながる要件を明らかにするとともに、「思いや意図をもって表現できる子ども」をめざしたいと考える。

今年度の学校提案「学びをデザインする子どもたち」及び重点目標「つなぐ・つむぐ・つくる」については、次の4つのことから達成できるようにしたい。

- ・学習過程「ひらく→しめす→わかる→できる（開・示・悟・入）」を用意して、子どもの心理的基盤を大切に、聴き合い、学び合う「学級風土」づくりを行うとともに、子どもの育ちが見える題材構成・評価計画を心がける。
- ・学年に応じて子どもが使える音楽的言語・用語の層を厚くする。
- ・「比べる」活動を用意することで、対象や他者、あるいは自己との多様な対話をつくる。
- ・「言葉の吟味、考えの吟味」（秋田 2009）が、言語活動を通して価値観形成へと至る過程で、表現領域の活動にも繋げられるようにする。

①音楽科における協同的な学び

音楽科における協同的な学びは、それぞれの子どもの感じたことをペアやグループ、あるいは集団で共有するところから始まると考える。感じたことを言葉で伝えられる場合もあれば、実際の歌う・演奏する・つくる・聴き合う活動を通して伝えることもあるだろう。さらに、歌詞や楽譜などの対象や既習内容の中に理由や根拠を見つけて吟味していくのが、協同的な学びだと捉えている。

②音楽科における「学ぶ筋道を考える」ためのポイント

ポイントの1つめは、「対象をしぼる」ことである。

全体をまるごとではなく、「このフレーズだけ」「この楽器の音色だけ」「このリズムだけ」というように対象をしぼって子どもたちに与える。集中するところを示すことにより、逆に全体がはつきりし、子どもたちの対象に対する世界が広がったり、深まったりすると考える。ただし、対象をしぼる条件として、教材での指導内容が含まれていることが必要だと考えている。

2つめは、「基礎・基本といわれる土台を定着する」ことである。

提示された課題に対して、自己の課題意識をもつためには基礎・基本が定着していることが大切であ

る。歌い方を工夫するのであれば、声の出し方をわかっていること、リズムづくりをするのであれば、音符や拍子などの意味を理解していることが必要である。こういった基礎・基本の土台を築くことで課題に対して前向きに取り組む姿勢を得られるのではないかと考える。既習内容を生かした順序立てたステップを積み重ねることにより、子どもたちが楽しく自然に基礎・基本の土台を身に付けるようにしていく。

3つめは、「比べる活動を取り入れる」ことである。

対象や自己との対話を促すための視点として、「比べる」活動を取り入れていく。同じ曲を長調と短調で聴き比べる・楽器の奏法の違いを生かした演奏を比べる・ワークシートなどの授業記録を活用して前時の自分の考えと本時の自分の考えの違いや深まりを比べる等々、子どもたちに意外性を与えるものを比べる対象として用意する。比べることで今までには気付かなかった新しい事実を発見したり、もっと深く考えたりできるようになる。一定のところまで止まっていた対象や自己との対話が「比べる」活動を取り入れることで活性化するのではないかと考える。

(2) 音楽科でめざす子どもの姿

「音楽が好きだ・歌いたい・演奏したい・作りたい・いろんな音楽を味わって聴きたい」さらに「仲間と一緒に歌ったり演奏したりしたい・仲間が好きな音楽にも興味がある・仲間の音楽表現にも興味がある・気持ちを込めて音楽を表現したい」子どもをめざす。

そのためには、音楽的「知識・理解(knowledge & comprehension)」「技能(skill)」「能力(ability, capacity)」の3つがバランスよく身に付いていることが必要になるであろう*。そこで音楽科がめざす子どもの姿を次のようにした。

(*ここで言う「能力」とは、「思考力・判断力・表現力」の総称である。)

音楽的「知識・理解(knowledge & comprehension)」「技能(skill)」「能力(ability, capacity)」の3つが、音楽的関心・意欲・態度に支えられてバランスよく身に付いている子ども

上の3つを身に付けることで、自分に合った生活スタイルを見つけ、自分を音楽で豊かにし、生涯音楽の基盤を手に入れようとする子どもになっていくと考える。同時に工夫して音楽を表現したり、仲間とのかかわりからも自分の音楽的世界を広げていったりする子どもが育つと考えている。

2. 音楽科学習における「学びをデザインする子どもたち」

音楽科学習における「学びをデザインする子どもたち」とは、

①学習したことが使えるようになること ②学び続ける目標がもてること

であると考え。すなわち音楽の学習を通して基礎的・基本的な知識、技能を確実に身に付け、活用する力を育むとともに、目標感をもってさまざまな音楽とかかわりをもつことだと捉えている。

そこで下記〔共通事項〕(抄)に着目し、思いや意図をもって音楽を表現したり鑑賞したりするための基を築いていきたい。

- ・音楽を形づくっている要素を聴き取り、面白さ、美しさを感じ取ること
- ・身近な音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について音楽活動を通して理解すること

これらは、すぐに身に付くものではなく、定着するためには繰り返し指導を行う必要がある。加えて具体的に「書く」および「ことば」または「からだ」で表す活動も必要となろう。グループで考える・表現するなどお互いに関わり合いながら学びをデザインする子どもたちを育てていきたい。

また、学び続ける目標をもつためには、達成感は欠かせないとする。「こんなことができた」「表現を聴いてもらえた」と満足した気持ちになることが大切である。達成感を味わうことで、次の活動意欲へつなげていくことができる。ただ、思いや意図をもつことができたとしても、その通り表現できるかは別問題であることも多い。そこで1人では表現しきれない思いや意図をグループやみんなで表現してそれらを比べていくことで音楽の魅力にせまりたい。

(1) 音楽科において私たちが期待する“子どもたちが学びをデザインする姿”

	低学年	中学年	高学年
課題解決	範唱や範奏を聴いて課題を見つけ、見通しをもって学ぼうとする	範唱や範奏、歌詞や楽譜を見て課題を見つけ、学習全体の見通しをもって学ぼうとする	音楽を形づくっている要素に着目し課題解決の筋道を自ら考え、学習活動全般を見通して学ぼうとする
対話	ペアを中心に仲間の考えや演奏にかかわり新たな考えに気づく	多様な考えや演奏に進んでかかわり、他者とともに新たな考えをうみだす	多様な考えや演奏に進んでかかわり、三位一体の対話で自己の変容に気づく
学び方	からだ・うごき・おとを生かそうとする	これまでの学び方を表現の活動に応じて活用しようとする	これまでの学び方を表現や鑑賞の活動に応じて選択し活用する

(表1 子どもたちが学びをデザインする姿)

(2) 音楽科における子どもへのみとりと支援

みとりについては、評価規準や評価計画の作成に尽きると考える。支援については教師と子どもの関係をまずつくり、子ども同士の関係づくりへと広げていく。①ICT機器の活用によって学習状況を把握しやすくする。②ワークシートの内容に工夫を凝らし考えや思いが的確に表現できるようにする。③書き込み状況を記録(コピー等)し、個人カルテとしていくことなどを留意点とする。

(3) 2年生実践「はくのまとまりをかんじとろう～2拍子と3拍子～」(本時)

2拍子や3拍子の拍の流れにのって手拍子をしたり、ステップを踏んだりするなどの活動を取り入れた歌唱・鑑賞活動である。本時は、2拍子である「アラベスク」と3拍子である「メヌエット」を聴き、それぞれの音楽に合わせて体を動かすことで、2拍子と3拍子の違いを感じ取らせたいと考えて行った。

「学びをデザインする子どもたちの姿」をめざして、次の①～③の活動を積極的に取り入れるようにした。①聴く視点を与えながら何度も聴く。②ペア活動やグループ活動を取り入れて、仲間とかかわり合いながら聴く。③自分の感じ方を広げるために、自分と友達の音楽に合わ



せた体の動きを比べる場面を取り入れる。

同じフレーズが聴こえたら手を挙げるなど、聴く視点を与えてから聴くことで子どもたちの集中力は高まり、楽曲の構造を学ぶことにもつながった。



また、ペア活動やグループ活動を取り入れたことによって、友達がどのように拍のまとまりを感じているのかをお互いに知ることができたのは、拍子感を高めていくのに効果的であったと考える。しかし、学びをデザインする子どもの姿をめざしていくためには、もっと子どもたち同士がかかわり合いながら感じ方を共有し合える場の設定を行う必要があった。そのためには、日頃から聴き合える学級風土を大切に

にし、教師が子ども一人一人を丁寧にみとることが大切であると感じた。

本時の中で、身体は3拍子の動きで動いているのに、実際に何拍子かと尋ねると「2拍子」という答えが子どもから返ってくるがあった。拍子感などはすぐに身に付くものではない。学習したことを使いながら、思いや意図をもって表現できる子どもの姿を求めて、日々の授業や生活の中でも繰り返し意識させるなどして、積み重ねながら取り組んでいきたい。

3. 研究の展望

音楽科では、子どもたちが質の高い音楽的な力を身に付けるために、「比べる」をキーワードに表現及び鑑賞の楽しい活動を通して、音楽の魅力にせまりたい。思いや意図をもって表現できる子どもを育てるために、以下の方法で楽しみながら学びをデザインする子どもたちをめざす。

- ① 表現と鑑賞の活動において、「比べる」学習の筋道を明らかにする。
- ② 意識を向け集中して聴く(見る)活動から、感じ取ったことを言葉などで表せられるようにする。
- ③ 「比べる」活動を「対話」とリンクさせることによって、楽しみながら学びをデザインすることをめざす。

4. 研究の評価

- ① 「比べる」活動を行うことで子どもたちの学びの姿が変化したか。その変化を表現にいかすことができたか。
- ② 「比べる」活動を行うことで子どもたちが思いや意図をもって表現することにつながったか。
- ③ 演奏の聴取や楽譜などから事実を見つけ、その事実を根拠として「吟味」する音楽的な言語力の高まりから、すべての子どもたちの学びの深まりが見られたか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもたちが改善されたか。
- ④ 課題設定の工夫(教材設定の工夫、発問の工夫、課題プリントの使用や一覧表示)によって、すべての子どもたちの学びが変化したか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもの学びが改善されたか。また学級の子どもたちの学びが、客観的に変化の様相を見せたといえるか。